

73

『金匱要略』大黃黃連瀉心湯条における
「心氣不足」に関する考証

莊 明仁

台湾 瑞聯中医診所

『金匱要略』驚悸吐衄下血胸滿瘀血病脉證治篇には「心氣不足 吐血衄血 瀉心湯主之」と記載されているが、心氣が不足しているのに何故瀉心湯が使えるのか？ この疑問に対しては多くの医家が答えが出せず、故に唐代の孫思邈は『備急千金要方』において、「心氣不足」を「心氣不定」に修正し、この処方「心小腸俱実」篇に分類して収載した。清代の呉謙は『医宗金鑑』において伝抄錯誤によるものとしており「『不足』の二字、まさにこれ『有余』の二字なるべし。もしこれ不足ならば如何にしてこの方にて之を治すや。必ずやこれ伝写の訛ならん。心氣有余で、熱が盛んなり。」と記述している。以上が錯簡派の意見の概略である。その他に陳修園のような尊経派は「心氣不足」の条文を必ずしも修正の必要のないものとし、注解していうには「妙は、黄連の苦寒、心の邪熱を瀉して、即ち心の不足を補う所以に有り。尤妙は大黃その血を通止し、而して其れをして、余瘀を稍停せしめざる所に有り。」と、実際にこれは心氣の解釈が違う事に基づく論である。孫思邈は心悸・心煩の症状を心氣不定とし、吉益東洞もこの説と同じ見解である。『医宗金鑑』では心氣を心火と解釈し、心に熱有る故、これを瀉すべきであるとしている。一方、陳修園は心氣の解釈を心陰としている。つまり心氣不足とは心の津液不足を指し、陽のみを盛んにし、迫血を妄行させている、或は邪氣の実があり正氣が虚しているという解釈である。これは『傷寒雜病論』の語法と一致しない考えである。

演者は「不」の字の訓詁学的考証に立ち戻って考えてみる。清代の王引之の『経伝釈詞』には「不は弗なり。不は詞なり。経伝に用いるところ、或いは不となし、或いは否となすも、其の實は一なり。発音ある者や、上文者を承けたるあり。経を解する者、但『不』の訓『否』、『否』の訓は不、不の訓は大なるを知り、而して其の又た語詞と為すを知らず。是において強いて注釋をなす、而して经文多くは通ずべからず。」と記載されている。「不」は経文中には否定の用法としている以外に、語詞としての用法、つまり虚字としての用法があり、意味を持たないというのである。この両者の用法は経文の解釈において全く相反しているが、後世の経文の解釈に際しては否定の意味で注解を加えている事が多く、この虚字の用法がある事が知られていない。この『経伝釈詞』には多くの例を挙げて説明している。例えば『尚書』にある「我生不有命在天。」は発音せず、「不有」は「有」である。『逸周書』にある「徒御不警、大庖不盈。」の「不警」は「警」であり、不盈は「盈」である。清代の呉昌瑩の『経詞衍釈』ではまた多くの例を挙げて、例えば『詩経』の「我心匪石、不可轉也。」の「不可」は「可」であり、『史記』伯夷列伝の「其文辭不少概見。」の「不少」は「少」をいい、『漢書』萬石君伝の「石慶出為齊相、齊國慕其家行不治、而齊國大治。」の「不治」は「治」をいうのである。

『黄帝内経』にもまた「不」を虚字とする用法がある。『素問』平人氣象論篇には「肝不弦 腎不石也」の記載がありこの「不弦」は即ち「弦」、「不石」は即ち「石」、つまり、「真藏脈は肝脈は弦で腎脈は石」という意味である。『傷寒雜病論』は後漢の時期に成立したもので、「博く衆方を採り、勤めて古訓を求める」方針で書かれたものであり、『湯液経』の流れを継承したものであるから、瀉心湯の条文の文字も簡潔であるはずである。「心氣不足」の「不足」を「足」と訓ずれば、心氣過剰、心氣有余の意味になり、どうして大黃黄連瀉心湯の適応になるのかが理解できるのである。